

多様化する受容のかたち——ディケンズの場合

畑田 美緒

他の多くの作家の場合と同様に、チャールズ・ディケンズに対する評価は、生前のものを含めればここ約 170 年の間に、時代の移り変わりとともに様々な変遷を辿ってきた。出版当時から肯定的にも否定的にも様々な批評されて来たディケンズ作品は、特に 19 世紀末の唯美主義、自然主義隆盛の時代以降しばらくは苦境に立たされたが、20 世紀半ばには威信を取り戻し、今日ではその娯楽性と芸術的価値の双方が評価される偉大な存在となっている。初期の批評には専門家以外によるものも多かったことは、彼の作品の読者層の厚みを示すものであると同時に、大衆性と文学性のどちらも等しく視野に入れた批評のあり方を喚起しているように思われる。本稿ではその可能性を秘めたものをいくつか紹介してみたい。

大衆性の結果でもあり原因でもあるものの一つとして、つい最近の *Oliver Twist* の映画化 (Polanski 監督) のようなアダプテーションの問題があげられるであろう。「ディケンズは映画などの翻案ものが最も多く作られている作家の一人に違いない」と、*Dickens and the Dream of Cinema*(Manchester UP, 2003)は指摘する。ディケンズを文化研究的観点から論じた本書で、Grahame Smith は、ディケンズの生前には存在さえしなかった映画というメディアの誕生と彼の作品の関係性を論じている。まず、しばしば指摘される映画と dreaming の類似性に言及した上で、「夢」がディケンズの世界でいかに中心的メタファーであることを示し、両者を関連づけることの正当性を主張している。さらに、彼の作品が持つ proto-filmic な要素として、一場面から他場面への素早い移動、文章のリズムがもたらす視覚的・聴覚的効果、parallel montage ともいべき映画的手法などをあげている。また、19 世紀の技術革新による社会の変化が人々の意識にも変化をもたらした中で、変化に敏感なディケンズが、静止画や写真に足りない「動き」を求めていた証拠を提示し、ベンヤミンの“dream in which every epoch sees in images the epoch which is to succeed it” という言葉から、ディケンズはその「夢」に関与した dreamer であると位置づける。

Grahame Smith は続いて「見ること」に焦点を当て、camera obscura、magic lantern、phantasmagoria、panorama、diorama など視覚に訴えかける装置を紹

介しながら、ディケンズとその各々との関係が分析されている。そして、彼が特に最後の2つにはテキスト中でも頻繁に言及し、演劇活動を通じて直接的な関わりを持っていたことに加え、「パノラマ」がディケンズの経験、認知力、表現にまで及ぶメタファーであることが示される。最後に、ディケンズの目は単に現実を映し出すのみならず、想像力の働きの寄与する (Orson Welles が考える) 良い映画作りに必要な優れたカメラのようである、と締めくくっている。

第3章では再びベンヤミンの、今度は“porousness”という概念を用い、映画誕生に向かいつつあった時代との関わりにおいて、ディケンズが“porous”であったと指摘している。そのためパノラマやジオラマ、写真、連載小説、メロドラマなど多彩な要素が自由にテキストの中に流入し、そこには過去や現在だけでなく未来の映画の夢、つまり想像力に満ちた新たな表現方法への可能性が開かれていることを指摘している。そして著者にとってのディケンズのテキストは、「映画のよう」であり“text-as-film”であるとあらためて強調する。

次に、ディケンズと関わり深いロンドンとパリを中心に、「都市」の問題が論じられている。この章では都市と街路、都市環境における光の役割、想像力と視覚化、動きなどの要素が、ディケンズの創造活動と芸術的なヴィジョンにどのように関係しているのかが分析される。暗く迷路のようなロンドンと明るくパノラマのようなパリの両都市が、「動き」と「光」という映画に不可欠な要素を彼の想像力に与え、その作品が将来映画を生み出すに至ったことが説明されている。

第5、6章では主にテクノロジーに注目してディケンズと映画の関係をさらに追求している。前者では、ディケンズがテクノロジーの進歩に対し、不安よりは肯定的見解を抱いていたことを指摘し、パノラマや鉄道旅行などの当時の科学技術の成果やイタリア旅行について彼が抱いた印象は、映画の出現に向かいつつあった時代と共に彼が歩んでいたことを示す、と述べている。後者ではディケンズと演劇の相互関係に言及し、19世紀の大衆娯楽と映画には技術的側面において連続性があることや、メロドラマとセンチメンタリティを利用することで善悪の衝突を表現していたヴィクトリア朝文化の道徳的風土が、初期の映画の世界にも受け継がれていたことが明示されている。

第7章は、André Bazin、Sergei Eisensteinらの先行研究に密着し、David Lean監督の映画 *Great Expectations* と *Oliver Twist* を取り上げながら、ディケンズのテキストには視覚のみならず聴覚に訴えかける要素も存在すること、さら

に文学と映画には人間の意識の表現という共通点があることを述べ、文学作品のアダプテーションは可能であるばかりか望ましいものであると主張している。次の章では、Christine Edzard 監督の映画 *Little Dorrit* を批判しながら、文学作品と映画の密接な結びつきが再び強調される。

さらに続く章では、ディケンズのテキストにおける言葉と形式に注目し、人物や状況が、周囲の物やジェスチャを詳細に描写することで現実性を与えられている点や、ディケンズが作品中で用いる言葉の動きは、移動撮影やクローズアップ、ディゾルブや編集、ブームショットなどの映画の手法を想起させるものである点に言及し、彼の作品の持つパノラマ性とともに映画誕生に貢献したことが指摘されている。そして最終章では、偉大な才能を持つディケンズと Orson Welles を比較してその共通点を分析し、ディケンズ作品を Welles が映画化したならば、という著者の「夢」で締めくくられている。

オリヴァーのような子供が主人公の作品が多いことが、ディケンズ文学を「子供向け」として軽んじる一因となってきたが、そこに文学的価値を見いだす批評家も少なくない。「孤児や孤児の境遇がディケンズの作品のいたる所にある」ことに注目した *Dickens: The Orphan Condition* (Fairleigh Dickinson UP, 1999) は、ディケンズの作品は「孤児の想像力」ともいうべき主観的視点から、自己を形成するあらゆるもの——地位、仕事、公民権、結婚、親子関係、財産など——を探究し、世の中に対する鋭い批判へと向かってゆく、と説明する。「孤児の状態」とは、客観的に親がいないことのみならず、拒絶され見捨てられた感覚や喪失感という精神状態をも表しているため、共通の体験として普遍化される。ディケンズの孤児たちは、自分を捨てた親への思慕または復讐心にとらわれた結果、確固たるアイデンティティの確立ができず、またこれらどちらの感情にも従えないままに成長した孤児たちは、無気力な抑うつ状態に陥るのである。著者 Baruch Hochman と Ilja Wachs は、ディケンズが「孤児の想像力」に身を委ねてしまうのではなく、それを抑制しようと努力もしており、中期の作品以降にはその葛藤が明白であることを指摘している。

個々の作品の分析は、孤児の問題が明白に扱われた最初の作品『オリヴァー・トゥイスト』に始まり、それが願望充足のファンタジーであると同時に、オリヴァーと異母兄弟モンクスとの相補的關係が、主人公とその実現されない願望を体現する人物たちという後続の作品に頻出する形の先駆となっていることが述べられる。次に、『オリヴァー』とは全く異なる枠組みで、労働倫理や現実の

社会に生きる人間としてのアイデンティティ形成の問題を扱ったものとする『デイヴィッド・コパフィールド』、問題を抱えた主人公の孤児エステーの苦しみが二重の語りとして表現されていると考えられる『荒涼館』の分析を経て、『リトル・ドリット』は生き生きとした可能性ではなく、厳しい制限を受けてあきらめの響きを持つ声が、無気力で自分の願望を実現できないほど受動的な主人公アーサーの行き止まりの成長過程を描き、不毛性や消極性が極端にまで押し進められた例であることが論じられる。そして最後に、アーサーの未完成な主観性とは対照的に、主人公の言葉で明確に客体化された人生経験を描く『大いなる遺産』は、ディケンズ自身の「孤児の状態」との戦いの現れであり、語り手と同様、そこから完全に脱却はできなかつたものの、葛藤自体が読者の想像力に力強く訴えかける作品を生み出したのであると主張している。

同じく「孤児」の問題をポストコロニアル的観点から扱った Laura Peters の *Orphan Texts: Victorian Orphans, Culture and Empire* (Manchester UP, 2000) は、ディケンズを含むヴィクトリア朝の小説や演劇、メロドラマ全般に孤児が繰り返して現れることに注目し、当時の社会で家庭が果たしていた役割の観点からその現象を説明しようとしたものである。最初に、家庭とそれが象徴するようになった正統性、人種、国家などはヴィクトリア朝の社会では理想にすぎない危うい存在となっていたこと、自身の正当性を再確認するために家庭はスケープゴートを必要としていたこと、そしてそのスケープゴートが孤児、特に貧しい階級の孤児であったことを著者は指摘する。家庭の喪失を体現している孤児は、希望と同時に脅威であり、毒でも薬でもある *pharmakon* 的役割を負わされ、異質なものとして追放されることで家庭（そして国家、帝国）の再確認が行われたのであることがフロイト、デリダなどの論を利用して示される。

次の章では、『嵐が丘』でアーンショウ家の中に異質なものとして存在するヒースクリフの問題を扱っている。著者はヴィクトリア朝の文化に内在する異質なものとしての孤児を描く3つの主要な方法、つまり素性の分からない謎の孤児、その生活様式によって定着、家庭、キリスト教、国家などの概念を揺らがせる流浪の民（ジプシー）と結びつけられる孤児、犯罪者となる孤児を取り上げ、これらとヒースクリフを比較対照して分析する。そうすることによって、『嵐が丘』が一作家の生み出した特異な小説ではなく、家庭、階級、国家のアイデンティティに関する帰属性／異質性に対する不安を語る、相互テクスト性を備えたものであることを明らかにしている。

ヒースクリフのように、最終的には家庭内に組み込まれなかった孤児はどうかなるのかが第3章では論じられている。ここでは当時の児童文学、特に孤児が登場する冒険物語を例に取り、帝国主義政策において孤児が果たす役割が示される。ヴィクトリア朝社会が、周縁化された他者性と内在する異質性を示すために孤児を利用していた一方、帝国の優越性に対する外からの脅威という形で外なる「他者」に対しての言説や権力が利用され、文明と未開の概念を生み出し、強めていた中で、貧しい階級の孤児がイングランドの外での帝国強化政策における重要な立役者であったことが言及される。そして、孤児の冒険物語があるレベルでは当時のイギリス社会の中で植民地化され、深い他者性を帯びた存在であった孤児の姿を提示すると同時に、別のレベルでは彼らの根無し草的な自由さが帝国の有効なエージェントとなる可能性を有することを暗示していると指摘するのである。

第4章では、改正救貧法のもとの救貧院における貧民救済に行き詰まりを感じていた19世紀半ばのイギリス政府が考えだした解決策、貧しい階級の孤児の植民地への移民に焦点が当てられる。まずはバミューダ、ニューサウスウェールズ、カナダへの移民計画を巡る歴史的コンテクストをそれぞれ説明した上で、ローズ・マコーリーの『孤児の島』を非嫡出性、階級、人種、国民性などに関するヴィクトリア朝の価値観を論じたものであると位置づける。島に移住させられた多種多様な民族の孤児たちは、孤児であることと異質であること(foreignness)の結びつきを示唆し、人種、民族、宗教、家系の純粋さに基づく英国性(Englishness)という概念を取り巻く緊張関係を際立たせると共に、そこに潜む異種族混交の恐怖を象徴している、と著者は述べる。本土で面倒を見きれなくなった孤児に新しい機会を与えるはずの植民地でも、結局は本国の延長そのものの社会的枠組が彼らを抑圧していたことが最後に強調されている。

最終章では、主としてジョージ・エリオットの『ダニエル・デロンダ』とディケンズの『エドウィン・ドルードの謎』を取り上げ、追放と帰還の問題を論じている。まず、エリオットは英国内のユダヤ人とユダヤ人共同体に体现される内なる差異に注目することで、帝国主義が生み出したコスモポリタニズムがイギリス国家のアイデンティティを脅かしている様子を暗示していると指摘し、小説の語り手が重視する“home”や“rootedness”を、家庭と国家の統一性に対するメランコリアというフロイトの概念と重ね合わせて読むことができる、と述べている。一方、『エドウィン・ドルード』が、大英帝国と他人種の接触を、大聖

堂のあるイギリスの古い町にまで入り込み汚染する伝染病とするディケンズの見解を提示していることに言及し、これら二人の作家が、英国内での野蛮状態の増大は帝国内の交流の所産であると考えていた、と結論づけている。そして締めくくりとして、ヴィクトリア朝の資本主義、工業化、近代化、帝国の拡大によって脅かされていた家庭／国家の統一性の理想を再確認するために必要であった孤児は、絶えず国家によって再生され、維持不可能な理想によるメランコリア、客体化、“mourning”の象徴であったことを改めて主張している。

ヴィクトリア朝小説全般を扱った *Orphan Texts* とは異なり、帝国主義とディケンズとの関係に特化した *Dickens and Empire: Discourses of Class, Race and Colonialism in the Works of Charles Dickens*(Ashgate Publishing, 2004)で Grace Moore は、海外移民、国家のアイデンティティ、奴隷制度、クリミア戦争、インド大反乱などの問題を取り上げ、特に 1850 年代半ばの英国内外での政策に失望感を増大させていたディケンズが、従来考えられていたような単純な人種差別主義者ではなく、彼の帝国や異人種に対する見解は、大変複雑で矛盾を孕んでいたことを示している。著者はインド大反乱がディケンズに与えた衝撃の大きさに言及し、その時期の『オール・ザ・イヤーズ・ラウンド』の記事に現れた反インド的姿勢と、『二都物語』の中でアレゴリー化されたインド大反乱の存在を指摘する。しかし、彼の過激な反応は一時的なもので、1860 年代以降は雑誌記事のトーンは反乱前と同じ落ち着きを取り戻し、階級と人種の問題を分けて考え別々に扱うことで、以前ほどの怒りを噴出させないようになっていったと結論づけている。

Wendy S. Jacobson(ed.)の *Dickens and the Children of Empire*(Palgrave, 2000)は、ディケンズ作品に頻出する「孤児」だけではない「子供」全般の問題とポストコロニアル理論を結びつけることで新しい読みの可能性を目指すもので、13 名の著者による多彩な論文が収録されている。例えば John Bowen は“Spirit and the Allegorical Child: Little Nell’s Mortal Aesthetic”で、『骨董屋』は、子供を主人公にした同時代の一連の小説の中で特異な位置を占めるもので、子供時代に付与される一般的概念（内面性、成長、進歩など）を大きく逸脱した「子供の他者性」が読み取れると主張する。著者はフロイト、ベンヤミンとアドルノ、デリダ達の論に立脚し、この小説は祖父のネルに対する「禁じられた欲望」、商品化された世界、そして言葉と語り自体によって、一種のアレゴリーとして解釈できる、生と死の狭間の“semi-mourning”の物語であると述べる。その上で、19 世紀小説

には、成長するデイヴィッドやピップのようリアルな子供たちとは異なり、ネルやポールのように死すべき運命を負うことでアレゴリー化されながらも内面性も備えた子供たちが存在することを指摘している。

18世紀後半に、大人と異なる生き物である「近代的孩子」を作り上げ、「他者」「異邦人」として遠く離れた領域へ追いやってしまったことによって生み出された問題は、James R. Kincaid の“Dickens and the Construction of the Child”の中心的テーマである。この論文では、子供時代は、大人が自らの内面的自己、痛み、願望などを投影し、都合良く利用するための「墮落した聖域」“sick sanctuary”となり、身近に存在する子供達の苦境には無関心である一方、「近代的孩子」は大人の身勝手なノスタルジアを満足させるための「無垢」な存在として理想化された観念となったことが述べられている。さらに、「他者」である子供が、性的欲望や搾取という邪悪な必要性に応えるための存在へと歪められていったことに言及し、オリヴァー・ツイストはまさに大人に自由に操られる「静的」子供の例であり、デイヴィッド・コパフィールドもまた、セルフメイド・マンであると主張しながらもすべてを他人の責任にする、他人によって形成された人物であると分析する。そして『大いなる遺産』が、慈悲や許しという古く非論理的な概念を利用することで、「大人が欲望を押し付けることのできる空白」ではない子供の可能性を提示している、と締めくくっている。

“Suppressing Narratives: Childhood and Empire in *The Uncommercial Traveller* and *Great Expectations*”で Grahame Smith は、『無商旅人』の『オール・ザ・イヤ・ラウンド』への掲載に始まり『大いなる遺産』の連載開始に終わった1860年という年に注目し、両作品における語りの抑制“suppression”をディケンズの伝記的事実と関連づけて分析している。この年にギャズ・ヒルで、20年来の不満足な私生活の証拠となる手紙や書類を焼き捨てたという“suppression”は小説による彼の自己探求の重要なきっかけとなり、また、この年以降、彼の息子達が海軍士官候補生や東方貿易商や陸軍軍人として、インドやカナダや合衆国へと散らばって行ったことが、作品内で子供と帝国が果たす役割に影響を与えたことを著者は指摘する。『旅人』に見られる子供たちの苦境に関する記述は、帝国の発展のために40年代以降抑圧されてきた現実が、自身の靴墨工場での抑圧されて来た記憶を呼び起こした故にディケンズには異化されて見え、彼が抑圧して来た語りを表面化させたのだ、というのである。そして、内部者でもあり外部者でもある旅人ディケンズと、国外追放され周縁に押しやられながらも、野

蛮で未開な周辺地域から中心世界へ愛を運んで来て主人公の贖罪の手助けとなるマグウィッチ（『大いなる遺産』）との並列関係に言及し、この2作品の中に抑圧からの解放の兆しを読み取っている。

“Dickens in Africa: ‘Africanizing’ *Hard Times*”は、『ハード・タイムズ』をアフリカの価値体系の観点から分析しようと試みている。Greenwell Matsika は、ズールー語の“Ubuntu”(=“person-hood, human-ness”)という言葉が表す概念に照らしてこの小説を考察し、都市生活における自然からの乖離と細分化、労働者階級やスリアリー率いるサーカス団の世界に対する他者化のプロセス、過去の歴史の抹殺などの種々の問題を、植民地支配下のアフリカの状況と比較対照して論じることで、異なる時代や文化的背景を持つ読者によるディケンズの新しい読み方の可能性を示唆している。

最後に、日本国内におけるディケンズ研究の最近の大きな成果の一つとして、今年5月に出版された『ディケンズ鑑賞大事典』（南雲堂）についてふれておく。本体と、19世紀のロンドンの地図（約20年おきのもの3種類）などの資料を含んだCD-ROMから成るこの事典は、作家の伝記に始まり、続いて『ボズのスケッチ集』から『エドウィン・ドルードの謎』までの主要な作品について、初出の形態と年月日、テキスト、時代背景、執筆出版に至る経緯、批評史、テーマや作品へのアプローチがそれぞれ述べられ、その他の小品も簡単に紹介されている。そして作家の想像力の源泉として、文学の土壌、都市ロンドン、19世紀の大衆娯楽が紹介され、次にはジャーナリズム、演劇活動、公開朗読、社会活動という、小説家として以外のディケンズの多岐にわたる活動が詳細に述べられている。さらに、ディケンズ文学の広がりという項目下では、挿絵や映画化の問題、日本の作家たちやシェイクスピア、ドストエフスキーとディケンズとの関わり等が扱われ、次には批評史、最後は詳細な項目別索引を伴っている。入門書にも参考書にもなりうるこの事典は、第5項目のタイトル通りまさに「ディケンズ文学の広がり」を目指したものであるといえる。拡大する読者層と共に、ディケンズ自身がそうであったように、時代や社会の変化に敏感に反応し、多様性や矛盾を抱きながらも優れたバランス感覚を示しつつ、常に新しい方向性を模索してゆくであろうディケンズ研究が、作品の娯楽性と文学的価値の双方を踏まえながら発展することで、ディケンズの世界が今後ますます広がりゆくことがここでも示唆されているように思われる。

【出典】 *Albion* （復刊第 53 号、京大英文学会、2007 年 11 月） pp. 140-149